

【研究ノート】

「六道図（大和文華館蔵）」をめぐって

2009年2月に刊行された『大和文華』119号は、当館所蔵の「六道図」(図1)を特輯した画期的な号でした。長らく仏教絵画の範疇で捉えられてきた「六道図」に、マニ教の教義による解釈がなされ、世界的にも極めて珍しい、マニ教絵画であることが明らかにされたのです。

マニ教とは、その名の通りマール・マーニー(Mār Mānī, 216~277?)が創始した宗教です。自ら聖書を著し、固有の文字としてマニ文字を考案するなど、多才な宗教家であったことが伺えます。彼は教義の解説に絵画を用いたことが知られ、彼が描いた絵は、その画絹から一本の糸を抜いただけで、描かれた線が見えなくなった、という逸話が伝わります。

ところが、マニ教に関する絵画はほとんど遺っておらず、断片的な遺例と文献史料によって想像するほかありませんでした。こうした状況の中で、今回の「六道図」(以下、本図と略称)に関する「発見」は大変重要であり、俄に世界の注目を集めています。

描かれた内容について確認します。詳細は上記『大和文華』所収の各論考を参照下さい。本図にはマニ教の終末観が表されています。すなわち、画面最上段に描かれた「天上世界」、中段の「人間界」、最下段の「地獄」という3世界です。

それぞれの間には、マニとマニ教僧侶及び信者、平等王による裁きの二場面が描かれます。この裁きの場面と天上世界には、マニ教の処女神「ダエーナ(Daēnā)」が、頭光を負った横向きの姿で表現されています。

本図が制作されたのは、中国・元時代(14世紀)とされます。日本との外交や交易の窓口であった港湾都市、寧波で描かれたと考えられてきました。ところで、今夏、奈良国立博物館で開催された特別展「聖地寧波—日本仏教1300年の源流」は、日本と中国との長い交流の中で、寧波からもたらされた仏教美術に焦点を当てた展覧会でした。南宋から元時代に制作された、いわゆる「寧波仏画」と称される作例も多数出陳され、当館の六道図と類似する表現の認められる作例がありました。重要文化財「観経序分義変相図(王宮曼荼羅圖)」(愛知・大恩寺蔵)(以下、大恩寺本と略称・図2)です。高麗仏画の名品として知られてきましたが、近年の研究では中国で制作されたと考えられています。「観経」すなわち、浄土三部経典の一つとして知られる「観無量寿経」の「序分義」を絵画化した仏画です。画面を三段に分け、主要登場人物である摩竭陀国王・頻婆沙羅、妃である韋提希夫人、息子の阿闍世太子を中心とした各場面を描きます。マニ教の

世界観と仏教経典の絵画化、描かれた内容は全く異なりますが、両者の絵画表現には驚くほどの共通性が認められるのです。本稿では、大恩寺本を手がかりに、本図の制作年代について考えてみたいと思います。

両者の人物描写に着目して比較を試みます。本図の画面上段には、光背を負い蓮台に座るマニと、その右側に同様の服装をしたマニ教僧侶が描かれます。二人のマニ僧の容貌は、眉と目尻がつり上がり、鼻の下から八の字に髭を蓄えたもので、墨線で丁寧に描き起こしています(図3)。同様の表現は、下段に描かれた平等王にも見られ、本図の顔貌表現に見られる特徴の一つです。大恩寺本では、画面下段に描かれた阿闍世太子が同様の特徴を備えています(図4)。

また、裁きの場面で雲に乗って登場した女神ダエーナは、やや顎の出た、首を前に伸ばした猫背の体型で描かれます(図5)。大恩寺本に描かれた韋提希夫人も一見して類似することが分かります。画面上部、釈迦如来に一心に祈りを捧げています(図6)。ただし、両者の彩色感覚には相違点も認められます。ダエーナの衣は、赤地に格子状の金泥文様が均一に施されており、大恩寺本に比して平板で単調な印象を与えます。羽のように広がる肩部分の装飾は共通するものの、時代の下降を示すものと思われる。一方、韋提希夫人は桃色の衣をまといますが、この桃色系の明るい彩色感覚は、同時期の寧波仏画との

共通性が指摘されています。

さらに注目すべきことは、両作品に記された銘の存在です。二重の枠線によって囲まれた短冊形に記されますが、荷葉形の傘を被せ、蓮台に乗っています(図7)。大恩寺本では下端が切り詰められており、確認できませんが同様の表現がなされていたと考えられます(図8)。

このように、本図と大恩寺本には画風や図像上の類似点が指摘できます。では、本図の制作はいつ頃なのでしょう。謎を解く鍵は大恩寺本の銘文にあります。「皇慶元年二月日題」とあり、1312年に描かれたことが分かるのです。従って、大恩寺本よりもその時期は降るものの、本図も元時代、14世紀中葉までの制作と考えて良いでしょう。

「寧波仏画」の作者として、十王図や羅漢図にその名を留める「金大受」「金處士」や「陸信忠」が知られます。彼らのような俗姓の絵師たちは、「車橋」や「石板巷」といった寧波の繁華街に工房を構え、市井の富裕な人々の求めに応じて仏画制作を行っていたと考えられています。時代は降りますが、本図の制作も、銘文中に見られるマニ教徒「張思義」の注文によるものと考えられます。そして、仏教絵画との間に認められた多くの共通性は、彼らのような絵師たちの間で、ある程度図像の共有が行われていたことを想定させ、仏画のみならず注文主たちの多様な信仰に対応できる、絵師ネットワークが機能していたものと思われる。

(古川攝一)



図1 六道図(当館蔵) 図2 観経序分義変相図(大恩寺蔵) 図3 マニ僧(六道図) 図4 阿闍世太子(観経序分義変相図) 図5 ダエーナ(六道図) 図6 韋提希夫人(観経序分義変相図) 図7 銘(六道図) 図8 銘(観経序分義変相図)